

◆ 特集 ◆

吉田一彦先生との思い出

吉田先生の思い出

吉林大学外国語学院日文系 副教授 原口耕一郎

私事で恐縮であるが、学部時代に歴史学どころか人文系専攻でもなかった私が日本古代史を学びたいと考え、名古屋市大の大学院を受験したのは2003年1月ではなかったかと思う。私は日本史学を正規に学んだことのない人間だったので、どこの大学にどのような先生がいらっしゃるのかもほとんど知らず、各大学のホームページを見てまわった記憶がある。その中で、吉田先生のもとで学ばせていただきたいと思った理由のひとつに、当時の先生のホームページ——たしか、私と入れ違いで修士を修了されたI氏が作成されたと聞いた記憶がある——の影響も少なからずあったような気がしている。というのも、そこには趣味紹介のようなコーナーがあり、先生がジャズやブルースやソウルなどアメリカ黒人音楽がお好きだということが書かれていたからである。私も同じような音楽が好きなので、名古屋市大の吉田研究室が第一候補のひとつとなった。

博士前期課程に入学後、実際に先生と音楽の話をし、先生からCDやレコードをお借りし、また私もソウルのレコードをお貸ししたこともあった。さらに、先生は学生時代に私の学部時代の母校のジャズ研に出入りされ、母校の脇にある飲み屋さんによく行かれていたとのことで、意外な縁を感じたものである。

なお、先生との「ファースト・インパクト」は私に強い印象を残したのであるが、これについては別に書いたので、ここでは触れない（その本は図書館にあると思います）。

それはともかく、このように日本史学／歴史学の基礎的な素養のない私を拾っていただき、言葉通りの意味でゼロから先生に教えていただくことになったのであるが、当然のことながら教わったこと／学んだことを数え上げることは不可能である。律令法の条文の読み方や理解の仕方、『日本書紀』を読む際の注意点、私のテーマに関係するであろう先行研究や研究者のご教示といった古代史研究の基礎的なことはもちろんであるが、ある意味ではそれ以上に重要なことを教えていただいたと考えている。それは、古代史研究に関する直接的なことというよりも、むしろ、ものの見方、考え方といった、いわば発想法である。

私は、これまでの人生において、先生ほど発想が柔軟で既存の価値観にとらわれない人を知らない。それは先生の研究テーマにおける史料の解釈や新たなアプローチを模索する姿勢を傍で見ながら感じたことであつたし、より直接的にはゼミでの議論や日常的な会話などで感じたことであつた。

紙数や内容の関係で詳述することはできないが、私が研究のことで相談すると、これまでまったく考えたこともなかったようなアイデア／理解を述べられたことがあつた。私だけではなく、おそらく先行研究でもまったく想定されていないようなことであつた。私は面食らい、啞然としたのち「それはちょっと極端ではないでしょうか・・・」と申し上げたのだが、後々冷静になってから考えてみると、「主張の強弱はともかく、発想としては基本的に正しいのかもしれない」と思い直したものである。学問の世界にも「常識」があるものだが、そのようなことにとらわれ

ず、自由な、というべきか、あるいは徹底的に疑う姿勢というべきか、オリジナリティーに富んだものの見方／考え方をなさんとを間近で体験できたことが、たぶん私の一番の財産となったと思う。むろんそれは、奇抜であったり突拍子もないことであったりはせず、きちんと筋が通っているのである。だからこそこのような柔軟さが先生の大きな武器となったであろうし、私自身も学ぶことが多かったのである。おそらく、多くのゼミ生が同じような体験をしたのではないだろうか。

最後に、楽しかった思い出のことを書いておきたい。私が院生だったころ、先生は長野、岐阜、福井を中心に山村の浄土真宗のことを調査されており、私も同行させていただいたことが何度もある。メンバーは先生、非常勤で名古屋市大にお越しの先生、それにゼミ生が数名ということが多かった。日帰りのときもあれば宿泊での調査もあったのだが、とにかく、車中や宿泊先での会話が楽しかった。もちろん雑談もあるが、仏教（史）に疎い私にとって、そこで先生の先生と非常勤の先生の会話を聞くことは耳学問として非常に有意義であった。

それに、現地に赴き地元の方に話を伺うということの少ない文献史学、それも古代史専攻の私にとって、現地検分、文書／美術資料の調査、聞き取り調査といったこと自体が初めてであり何もかもが新鮮であった。今にして思えば、これも先生の教育の一環だったのかもしれない。

私はいま、中国の大学で教鞭をとっているが、教壇に立ってはじめて分かるわが師の恩に思いが至ることがたびたびある。そのうえでなお思うのだが、先生は職業としては定年されるが、研究者としてはこれからも斬新なことをなされ続けるであろうから、今後も変わらず教えを請い続けたいと願っている。

2006年11月25日、福井県大野市の山村での浄土真宗関連の聞き取り調査。
山田容功氏撮影。



説話と論文

—吉田先生の指導—

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程 修了生 市岡 聡

『人間文化研究所年報』第16号で「吉田先生退官記念特集」を組むことになったので、吉田先生の思い出や研究について執筆してほしいという連絡があったのは、昨年12月初めのことであった。連絡を受けてから、何を書こうか考え続けたが、これはとても悩ましい問題だった。吉田先生と私は、私が本学の大学院入学以来、10年以上のお付き合いになる。ゼミでの史料講読や授業、飲み会やゼミ旅行など、思い出が尽きない。あれもこれも書きたいとも思うが、それらを語るに

は、与えられた文字数では足りない。では、吉田先生の研究について書こうか。しかし、先生の研究は奥が深い上に幅が広いので、それも到底書ききれものではない。悩んだ末、私の研究分野である仏教説話と吉田先生の論文指導という切り口から話を進めようとするに至った。

まず、仏教説話についてである。私は、吉田先生から仏教説話を見る視点を三ついただいたと考えている。一つ目は、仏教説話を史料として見る視点である。吉田先生のご著書に『民衆の古代史—『日本靈異記』に見るもう一つの古代—』（風媒社、平成18年）という本がある。この本は、いわゆる「律令国家」論では語り尽くせない古代の社会の様相を、日本最古の仏教説話集『日本靈異記』を用いて説くというものであり、仏教説話を史料として用いるという斬新な視点を提示してくれた。これを読んで私の世界が広がった。他の研究者からの批判もあるが、『日本靈異記』を史料として見るということは非常に重要であると考えている。

私は、比叡山横川の僧・鎮源が11世紀中頃に編んだ、『法華経』の靈験を集めた説話集『大日本国法華経験記』（『法華験記』）を研究している。『法華験記』には、さまざまな内容が含まれているが、それらを丹念に読んでいくと、史実とリンクする部分があり、この部分を読解することで、新たな『法華験記』像が見えてくる。この新たな像を見出す作業は、説話を史料として見るという視点なければできないことである。仏教説話には時として荒唐無稽な話が含まれることから、史料とは無関係の位置に置かれることがあるが、史料として見るという視点は、さまざまな仏教説話に適用でき、これによって、仏教説話の新たな読解が可能となると考えている。

二つ目は、仏教説話集を仏書として見る視点である。昨年12月、吉田先生は「仏書としての『日本靈異記』—冥界の思想と仏法の思想の対決—」と題した基調講演を仏教文学会例会においてなされ、『日本靈異記』の著者・景戒は、同書を文芸書や歴史書としてではなく、「仏法を広く流布せしめるための仏書（仏法書）」として書いたと語られた。僧が編んだ説話集なのだから、当り前のようにも見えるが、この視点はとても重要である。

『日本靈異記』と『法華験記』とでは成立した時代が異なるし、編まれた目的も異なる。景戒は薬師寺僧で、鎮源は延暦寺僧であるという違いもある。しかし、両書ともに仏法を流布させるために編まれたという根底は同じである。この発想と、説話が語られた時代背景、編者が所属する宗派の教理教学を意識することによって、その説話集に対する理解が一層深くなる。

三つ目は、分野横断的に説話を見る目である。吉田先生は分野横断的という視点を非常に重視されており、吉田一彦・上島享編『日本宗教史1 日本宗教史を問い直す』（吉川弘文館、2020年）にもこの視点の重要さが説かれている。この視点は、仏教史全般という大きな括りだけではなく、仏教説話を理解する上でも不可欠である。たとえば、古代の地方寺院や地方の仏教に関する歴史的考察は、関係する史料が少ないことから、難しい研究のひとつとなっている。しかし、分野横断的な視点を活用し、考古学や地理学などの知見を活かすことによって、これまでに見えなかった古代地方寺院の姿が見えることもある。私は、この手法を活用することで、和歌山県にある道成寺（「道成寺と『法華験記』—鐘鑄勸進と説話の成立—」『藝能史研究』224号、2019年）と山口県にある二井寺（現・極楽寺）（「二井寺説話から見る『法華験記』と地方寺院」『アジアの中の日本文化』風間書房、2019年）について論考することができた。

私は、これからもこれら三つの視点を大切にし、『法華験記』を通じた比叡山横川における信仰や地方寺院の信仰、平安時代中期の信仰について研究を進めていきたいと考えている。

次に、吉田先生の論文指導について見てみたい。学術論文は、一朝一夕にはできない。テーマを定め、いろいろなことを調べ、先行研究を読み、自分なりの理論を組み立て、自分の言葉で文

章を書く。何回も推敲し、行ったり来たりしながら、ようやく原稿ができあがる。これを吉田先生の指導を仰ぐために先生のもとへ送ると、数週間後に添削されて戻ってくるのだが、返ってきた原稿は真っ赤になっていることが多い。その原稿の様相にとっても打ちひしがれるが、添削内容や先生の意見等を読んでいくと、自分の考えの浅さや、先行研究の調査不足が明らかになる。先生からの指摘事項を調べたり、文章の改変などをして再提出すると、再び真っ赤になって戻ってくる。これを繰り返すうちに、吉田先生が言わんとしていることが理解できてくる。もっと早い段階で気づけば先生のお手を煩わす回数が減るのだろうが、不肖な私は添削の繰り返しでやっとな気がつく。このやりとりを数回繰り返して原稿ができ上がるのだが、添削後の原稿は添削前のものに比べ、格段に良くなっている。筆が遅いので、私の論文は数回しか雑誌等に掲載されていないが、吉田先生のご指導がなかったら、一度たりとも雑誌掲載に結びつかなかったであろう。今の私の成果があるのは、吉田先生のお陰である。感謝してもしきれない。

ところで、吉田先生の指導によって吉田門下の研究員4人が科研費を取得し、お世話になった名古屋市立大学へ恩返しをすることができているが、これは吉田先生の指導がなければできないことだっただろう。吉田先生は、教育者としても研究者としても超一流な、とても貴重な人材であり、名古屋市立大学の宝だと思う。吉田先生がこの名古屋に、名古屋市立大学教授としていてくださって本当に良かったと思う。これは、私だけではなく先生にお世話になった学生は皆、そう思っているに違いない。このご縁が本当に有難い。

最後に、吉田ゼミの特徴を生かした内容で本稿を締めたい。吉田先生は、よく「業」という言葉を口にされる。一般に「業が深い」などと使われる「業」と同じで、仏教用語である。吉田ゼミと酒とはとても縁が深い。この縁は、きっと吉田先生と我々ゼミ生たちの酒にまつわる「業」なのだろう。コロナという疫病蔓延によって飲み会の機会も減った。しかし、退官されても我々に染み付いたこの業からは逃れられないに違いない。吉田先生は近年の研究で、般若の力が疫神を退治することを明らかにされている。この般若の力でコロナという疫神が退散したあかつきには、吉田先生やゼミのみんなと美味しい般若湯（お酒）を思う存分飲みたいものだ。

吉田先生との思い出

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程 修了生 柴田憲良

恩師吉田一彦先生が本年定年退職の嘉節を迎えられるとのこと、誠におめでたくお慶び申し上げます。また長年にわたる学生への教育、お疲れ様でございました。

吉田先生との出会いは、平成二十一年に開かれた日本仏教総合研究学会の第八回学術大会であった。当時、私は、比叡山麓にある叡山学院に在学し、三か月後の卒業を目指していた。卒業後の進路について日々悩んでいたが、本格的な学問に触れてみたいという思いが日増しに強くなっていった。愛知の自坊から仕事をしながら通える点を唯一の条件として、叡山学院の先生に相談したところ、吉田先生を紹介してくれるという。今週の日曜日に、京都府立大学で開かれる学会に来るようにとのことであった。今思えば、この相談が一週間遅ければ、まったく違う選択になっていたかもしれない。吉田先生は、講演の司会を務められていた。先生の立て板に水のような話し方に、思わずのめりこんでしまったことをはっきりと覚えている。大学院修了後、この学

会に幹事として係わることになるうとはこの時は考えもしなかった。

入学後、課題研究での最初の発表に対して、「(研究の)種だね」とおっしゃったのを覚えている。叡山学院の卒業論文を抜粋して発表したのだが、未熟な出来であった。叡山学院は、僧侶の養成機関であり、教学や仏教史などの座学の他に、各種法要・声明・御詠歌・止観・書道などの実習科目が豊富であるため、私にとっては研究に対する時間的比重を軽くせざるをえなかった。現在でも同じような言い訳をしているのは、誠に情けなく思う次第である。こうした理由から、課題研究での発表は、先行研究は取り上げず、史料のみの紹介に終始した。先生は、「これまでは戒・定・慧を実践してきたんだね。これからは科学的な研究をしよう」とおっしゃって、発表内容に関連する先行研究を収集した大事なフォルダを惜しげもなく提示して、取り急ぎすべて読むようにと教示された。私のこれまでのなっていない研究態度を肯定的に捉えた上で、今後の課題を速やかにかつ的確に見出し、さらに自身の貴重な時間を使って集めた史資料をためらいなく提供する先生の指導方針に接し、私もこういう人間でありたいと感じた。

先生は、学会を震撼させるような独創的な考想についてすら日常的に惜しげもなく披露する。学会後の懇親会では、多くの先生方と議論を戦わせ、その度に興味深く驚くべき新知見を流出させる。各個の研究成果は、学会に提出し、議論を繰り返すことで人類の叡智となるのだろう。先生の研究態度は、他の研究を尊重することに直結している。拙論を恐る恐る先生に見せると、その度に丁寧にご読んでくださり、まだまだがんばろうという気にさせてくれた。

前期課程一年生の自主ゼミは、夜七時四〇分から開かれた。一応、九時一〇分で終わりだが、議論が白熱すると一〇時を過ぎた。内容は、『延喜式』の輪読であった。「應に〜すべきの事」と読むとか、「謂」を「いうところは」と読むのだと教えられた。後者は、先生の師である彌永貞三氏のさらに師匠にあたる坂本太郎氏から伝わる伝統的な読み方だという。史料の読み方は、それによって学派がわかるため重要である。私も先生の学系に連なることができた喜びを感じた。師資相承である。

ゼミに参加すると大なり小なり必ず発見があった。なぜなら先生が発見するからだ。史料の分担箇所を辞書や先行論文などを添付して読解していくのが基本的な準備作業なのだが、先生は明らかに準備不足の発表であっても、時間をかけて読解していく。史料の一文字一文字にこだわり、ある時は大きな視座から読解することによって、もっと調べれば論文として成り立つかもしれないと学生にアドバイスをしていた。とても楽しそうに史料を読み進めていく姿勢を見て、研究は楽しいのだと思わせてくれたのはありがたいことだと思う。もちろん研究は楽しい時ばかりではなく、苦しい時の方がむしろ多いが、新しい発見を求めて生きることができるのは人生にとって大いなる喜びだと感じている。研究課題を抱えて日々過ごすことで、直接的に研究に係わらない事象であっても、深く考えようとする習慣が養われたと思う。吉田ゼミの卒業生は、研究を生業とせずとも、充実した生活を送っていることだろう。

先生は多くの偉大な研究者にめぐり合わせてくれた。現在も継続的にご教示をいただいている先生方も多い。冒頭で触れた日本仏教総合研究学会には、吉田先生が会長に就任されるタイミングと私が大学院を修了するタイミングが一致したため、非力ながら幹事として係わることができた。役員の方には大変お世話になっているが、ひとえに吉田先生の弟子だからだと理解している。先生が紹介してくださった研究者の中に、藪田香融先生がいる。大谷大学で開催された仏教史学会にて縁をつないでくださった。藪田先生は最澄研究の第一人者で、この時は「照千一隅」についての講演であった。私の研究テーマが最澄の思想であり、かつ天台宗の僧侶であることか

ら、度々お電話やお手紙を頂戴し、貴重なご教示をいただけたのは幸いであった。

最後に、旅行の思い出を記しておきたい。先生は現地調査を重視しており、度々調査旅行に同行させていただいた。京都・奈良・山陰をはじめ比叡山にも行った。特に、佐藤文子先生や平雅行先生らと法華大会を見学したのは、貴重な経験であった。法要を執行する側ではなく、あくまで研究対象として客観的に法要を分析する体験を経たことで、自身の立ち位置は僧侶なのか研究者なのかではなく、その両眼で法要を観察していく必要性に気づくことができた。

また、中国・韓国・台湾といった海外調査も実施した。旅行の思い出はとても楽しい記憶が多いのだが、活字化せず大切に胸に秘めておきたいと思う。ただ一つだけ、先生が絶対に覚えておくようにとおっしゃったことだけ記しておきたい。台湾旅行では、予定のない路傍の祠を見つけるたびに見学時間が増えていった。遅めの夕食の際、先生から小籠包の食べ方をご教示いただいた。それはスプーンで小籠包をすくい、小籠包の肉汁がこぼれないように細心の注意を払って食すといったもので、確かにその時は知らなかったが、後にごくごく常識的な食べ方であったと知った。だが、先生は、「これから小籠包の食べ方を伝授するから忘れないように」と殊更に強調した。これには背景があった。実は、私が先生の親友である増尾伸一郎先生から焼酎の飲み方を教えてもらったと日中に話したのに対抗したもので、それを思うと心底おかしかった。先生は、とても偉大な学者で、日常会話ですら理知的であり、使用言語はやたら漢語的なのだが、このようにどこかかわいらしい。恩師に対してこんな失礼なことを書けてしまうのも、先生の包容力によるものとお許しいただきたい。

先生の研究は、より深くより広くより斬新な知見を提示しつつも、平易かつ美しい文章で表現されている。さながら時代の先端をいく音楽を聴いているかのように、文章が流れている。定年とはいえ、益々ご壮健でいらっしゃるの、今後の研究もまた一層の独創的な発想で学会をリードするスターであり続けてください。

研究者の師であり、教育者の師である吉田一彦先生

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程 修了生 浅岡悦子

恩師、吉田一彦先生が本年度をもって退官を迎えられること、心よりお慶び申し上げます。

私が吉田先生の講義を初めて受講したのは2009年の春だった。

その当時、他大学の文学部の学部生だった私は、『古事記』という漠然とした研究テーマを見定め始めていた頃だった。しかし、在籍していた大学には上代文学を専門とする教員がいなかった。膨大な研究史を持ち、様々な角度から盛んな研究が行われている『古事記』という書物を前に、私は殆ど独学で学ばなければならない状況にあった。そんな事実と直面し途方に暮れていたのを覚えている。そんな折、名古屋市立大学人文社会学部に在籍していた知り合いから、「名古屋市立大学に、『日本書紀』を研究している先生がいらっしゃる」という話を聞いた。『古事記』と『日本書紀』の違いすら深く考えていなかった私は、すぐさま大学間の単位互換制度を利用し、毎週一回、吉田先生の講義を受講するために名古屋市立大学に通うことにした。

科目名は「日本の歴史（日本社会史）」。吉田先生の講義は大変分かりやすく、授業の90分間だけは吉田先生の知識を吸収し、日本の歴史に大変詳しくなった気持ちになる。しかし、翌日に

なってみると、講義内で吉田先生にご教示いただいたことを説明しようとしても殆ど説明できない。何故なら、吉田先生はその膨大な知識の中から適切な例を取り出し、一つの事を様々な角度から幅広い視点で取り上げ講義を行うからだ。その視点は、日本についての授業にも関わらず、内容は日本のことだけに留まらなかった。

例えば、「日本の歴史」とはまた別の講義ではあるが、「日本文化史」の授業中に配布された授業資料を見てみる。第四回目の授業資料の冒頭にトルストイ『木の皮屋根のついた蜜蜂の巣の異なった二つの歴史』の内容が示されている。雄蜂の史料編纂官が記した歴史は、著名な雄蜂の手記や王族の書簡、貴族の官報、雄蜂と蜜蜂の刑事事件・民事事件などに基づいて記されている。一方、働き蜂たちが描く歴史は「早春に始まり、春から夏へ、秋へ、冬へ。大自然の推移とともにある働き蜂たちの営みの歴史」が記されていると資料にはある。ロシアの小説家であるトルストイの著作に登場する二つの例から、吉田先生は授業の中で、歴史を編纂する人間の価値観や生き方によって、歴史認識は大きく異なることを指摘された。そして、この認識の差が歴史を考えるうえでの根本問題であると説かれた。この後、授業資料は「日本史はどう書かれてきたか。」と続く。「日本文化史」という講義のなかで、海外文学を例に歴史書の文化史を語り始める吉田先生の講義は衝撃的だった。劇的で、ドラマチックでもある授業の導入に惹きこまれ、90分間は自分が吉田先生の次に賢くなったのではないかとすら錯覚するほど分かりやすい授業が続く。しかし、内容は、国家編纂の歴史書として『日本書紀』を初めとした六国史についての研究史や史料の価値、『古事記』の歴史的な扱い、『日本後紀』の欠巻を補うことができる『類聚国史』の説明など、アカデミックなものである。当然、たった90分では全てを自分の知識として吸収し理解することは不可能であり、復習が必要となる。ただ、不思議と吉田先生の講義を聞いている時間だけは、その内容が理論整然と頭の中に展開するのだ。吉田先生の語り口と解説の巧みさが成せることなのだろう。吉田先生の講義は学生だけでなく、外部にも多くのファンを持つ。名古屋市立大学が主催するサイエンスカフェで吉田先生が講師をされた際は、予約が取れずに当日の会場運営や受付の補助をすることで参加できたほどだった。

ところで、名古屋市立大学大学院人間文化研究科入学試験の面接中に吉田先生から頂いた質問を、私は今でも忘れることができない。

何故、(研究テーマが)『古事記』なんですか。『日本書紀』ではいけないんですか。

私はこの問いに答えることができなかった。恥ずかしながら吉田先生に問われるまで、『日本書紀』ではなく『古事記』を研究テーマに選択したことに深い意味はなかった。『日本書紀』より『古事記』の方が成立年が古いからなどという、表面的な答えではなく、今後、『古事記』に対する問題意識と、『古事記』に向き合っていく姿勢を問われた気がした。大学院修士の同期生も、専門が異なっていたとしても吉田先生の質問はいつも本質を捉える問いばかりで、どきりとさせられると言う。吉田先生からの質問に十分に答えられたとは言えなかったが、幸いにも私は入学試験に合格することができ、吉田先生の下で“日本の歴史”の最初期に位置づけられる書を学ぶ機会を得た。ゼミ(史料講読)では『日本書紀私記』や『古語拾遺』を講読し、現在では『古事記』の受容史について研究を進めている。

『日本書紀私記』は『日本書紀』成立当初から貴族の間で何度か行われた『日本書紀』の講義記録である。『日本書紀私記』によると、『日本書紀』冒頭にある「溟滓」という語は「メイケイ」



2011年7月17日 サイエンスカフェ

の他に「ククモリテ」「ホノカニシテ」「クラゲナスタダヨヒテ」などと訓まれる。「クラゲナスタダヨヒテ」は『古事記』にある「久羅下那州多陀用弊流（クラゲナスタダヨヘル）」という記述から導かれている¹。ゼミ（史料講読）で『日本書紀私記』を講読して以来、『古事記』と『日本書紀』の違いを語るうえで、吉田先生と私の間ではまるで合言葉のように「「クラゲナスタダヨヒテ」のように」と締めるようになった。このように、大学院では『古事記』と『日本書紀』を比較し考える機会を与えられた。しかし、『日本書紀』ではなく、『古事記』を研究する理由は、入試の日から十年以上経った現在でも、満足のいく答えを出せないでいる。今、あの日に戻ったとしても、私は吉田先生の問いに自分が満足する答えを返すことは出来ないだろう。いつか、胸を張ってその問いに答えられる自分になれるよう、日々吉田先生からの問いを胸に研究を続けている。

現在、私はある大学で「日本文化総論」という科目を受け持っている。実際に授業を行う立場になると、改めて吉田先生の講義の巧さを実感する。吉田先生ほど魅力的な授業ができるとは思えないが、少しでも「日本文化史」や「日本の歴史」の授業を受けた学部生の時の自分と同じ気持ちで、現在「日本文化総論」を受講している学生に持ってもらいたい。吉田先生は自分にとって、研究者としての師匠だけでなく、教育者としての師匠でもあり、生涯目標にし続ける存在なのだ改めて感じた。

最後となりますが、吉田先生には長年にわたり、研究面でなく、教育者としてもご厚情とご指導を賜り、誠に感謝しております。今後も吉田一彦先生の益々のご隆盛を祈念いたします。

¹ 吉田一彦『日本書紀の呪縛』（集英社新書 2016年）では「久羅下那州多陀用弊流（クラゲナスタダヨヘル）」という記述は日本書紀講書以降のものとするべきではないのか」と指摘している。

吉田先生と私の歴史研究

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程 修了生 手嶋大侑

吉田先生と初めてお会いしたのは、私が名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科に入学した2010年になります。小さい頃から古代史に興味があり、歴史学の道に進みたいと思っていた私は、さっそく先生の「日本宗教史」や「日本社会史」などを履修し、参考文献に指定されていた『古代仏教をよみなおす』（吉川弘文館、2006年）を購入。先生の授業では、『日本書紀』、天皇制度、聖徳太子信仰、仏教などのテーマを扱っており、そこで話される内容は、それまでの自分が持っていた理解とは違う刺激的なもので、驚きつつも、歴史の面白さを再確認した授業だったことを覚えています。

2年生になって吉田ゼミに入り、先生の下で歴史学を学びはじめてから、気づけばもう10年になります。その間、先生からいただいた学恩は数えきれないほどあり、先生との思い出も山ほどあります。そのすべてを書くことはできないので、今回は、研究面を中心に、お世話になった10年を振り返っていきたいと思います。

研究テーマとの出会い

吉田先生のゼミでは、『日本三代実録』をテキストにしていました。最初のゼミで先生は、『日本三代実録』の文章は菅原道真が書いたものだから、きちんとした漢文になっていて読みやすい」と説明してくれましたが、それまで野球ばかりやっていた私にとっては、漢文自体が難しく、最初の頃はかなり苦戦しながら読んでいたのを覚えています。漢文を読む練習をはじめてから3、4ヵ月ほど経った頃、先生から「手嶋くん、ここ発表してみる？」と言われ、貞観7年正月17、18、19、25日条を発表することになりました。25日条が「年官」の初見史料だったので、年官について調べて発表しました。緊張していたのか、その時の記憶は曖昧ですが、卒論のテーマを選ぶ時期になり、過去のレジュメを見返していると、初めて発表した年官が目にとまり、年官が候補になりました。そこで先生に相談しに行くと、「年官は可能性があるテーマだよ」という助言をいただいたので、年官で卒論を書くことに決めました。これが、私の研究のメインテーマとなる年官との出会いになります。

今振り返ると、卒論のテーマに年官を選んだ時が、私の研究者人生のターニングポイントだったと言えるので、年官を研究しようと決心させてくれた、あの時の先生のお言葉はとても大きかったなと思います。

先生との現地調査

大学院進学後は、先生が代表者を務める科研の研究会へ参加させていただく機会が増え、国内、国外を問わず、多くの調査へ同行させていただきました。初めて調査に同行させていただいたのは、博士前期課程に進学したばかりの2014年夏でした。この時は、三重県伊賀市の常楽寺が所蔵する「道行知識経」という古写経の調査で、初めて見る生の古代史料に興味したこと、「道行知識経」の写真撮影を手伝い、歴史研究をしている実感が湧いたことを覚えています。この他にも、同行させてもらった調査は多いのですが、その中でも、麦積山石窟、炳靈寺石窟、法門寺などを訪れた2017年の中国甘粛省・陝西省の調査は、私の中で大きな経験として残っています。大学院の吉田ゼミでも、年に1、2回、国内外のさまざまな史跡、寺院、神社、博物館、資料館

を訪れました。目的の史跡が見つからない時は、雑草をかきわけて探したのも良い思い出です。

そうした現地調査で記憶に残っている先生の姿は、みんなが疲れて休憩している時でも、休憩せずに写真を撮り続けたり、誰よりも長く史資料を見ていたりする姿です。ある調査後、どれだけ写真を撮ったんですか？と聞くと、「1000枚以上かな（笑）」とおっしゃっていて、驚いた記憶がありますが、最近では、私も現地調査を行った時には、先生を見習って、できるだけ多くの写真を撮ろうと思うようになりました。

先生との調査は知的好奇心を刺激する楽しいものなので、今後もご一緒したいと思っています。

先生に繋いでもらった人脈

私が初めて研究会というものに参加したのは学部3年生の時でした。ある日、先生から、名古屋古代史研究会という研究会があることを聞いた私は、参加したい旨を伝えました。すると、「じゃあ連れて行ってあげるから、当日は手作りでいいので名刺を持ってきなさい」と言われ、名刺を作って参加したのを覚えています。研究会当日、先生は、院進を希望している学生として知り合いの方々から私を紹介してくれました。この初参加をきっかけにして、私は名古屋古代史研究会へ参加するようになり、徐々に、学外の研究者との縁が広がっていきました。また先生は、私が愛知県立大学の授業を受けたいと相談すれば、県大の丸山裕美子先生を、平安時代の日記を読む練習がしたいと相談すれば、愛知学院大学の松菌齊先生を紹介してくれました。御多忙だったにも関わらず、多くのきっかけを与えていただいた先生には感謝しかありません。

こうして先生につないでもらった人脈は、私にとってなくてはならないものになっており、今の私が大事にしている「春記の会」や「蓬左文庫典籍研究会」などの研究会・勉強会は、こうした人脈からはじまっています。

先生と私の歴史研究

まだまだ書きたいことは多いですが、紙幅の都合もあるので、先生からいただいた学恩に感謝を述べて筆を置くことにします。

ご専門が古代仏教史、宗教史であるにも関わらず、それとは全く違う社会経済史をテーマにした私の進学を認めてくださり、一人前の研究者に育ててくださった先生には、感謝の気持ちでいっぱいです。先生は、「僕の先生は彌永貞三だから、社会経済史もできるんだよ」と言って、私の研究をみてくれましたが、専門が違うテーマを指導することは簡単にはできないのではないかと思います。あらためて、豊富な知識量と広い問題関心を持つ先生を尊敬するばかりです。

博士後期課程の時からずっと、先生から「荘園の日中比較研究は誰かがやらないといけないテーマだから、手嶋くんがやりなさい」と言われています。今の實力では到底かなわないですが、いつかこのテーマで成果をあげ、先生からいただいた多大な学恩に少しでも報いたいと思います。

吉田先生のご退職によせて

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程 井上友莉子

吉田先生、この度はご退職を迎えられるということで、誠におめでとうございます。

私が名古屋市立大学に入学し、吉田先生と出会ってから、早13年が経ちました。当時は特に将来設計もなく、幅広く社会の事が学べる社会学部に入ろうと考え、こちらの大学を選びました。

先生方の分野はばらばらで、様々な講義を受けることができましたが、その中で、日本史を担当されていた吉田先生のお話は、とても興味深く、いつも楽しく講義を受けていたことを思い出します。高校で世界史を専攻していた者としては初めて知ることも多く、大変勉強になりました。学部生時代に、顕密体制や権門体制など中世日本社会の仕組みを、学生たちが飽きないよう、雑談を交えながら分かりやすく講義して下さったことを、今でも覚えております。

3年生でゼミを選択することになった時、実を言えば少々迷いがありました。卒業後一般企業に就職することは決めていたので、就職希望をしている業界と近いことが学べるゼミがいいのではないかと、漠然と考えておりました。一方で、先生の講義を拝聴しているうちに、先生のもとで勉強してみたいという思いも湧いてきていました。もともと寺院の静謐さやお線香の匂いが好きで、親に連れられていろいろと巡っているうちに、深い知識はなくても寺院というものに親近感を持っておりました。それならば、好きな先生のもとで興味のあることをやろうと、吉田ゼミの門を叩きました。

初めの頃は、漢文を読むのに一苦労していました（それは今もですが）。必死に高校時代までの漢文の知識を思い出し、大漢和辞典を繰り、読解していました。4年生になり、卒業論文のテーマを決める時、寺院に関係があることで論文を書きたいとお話ししたところ、先生は「神仏習合についてやってみたらどうか。最近成尊という僧が、アマテラス=大日如来の同体説に関わっていることがわかったから、その成尊が書いた『真言付法纂要抄』を研究してみたら面白いんじゃない?」ということで、卒業論文の方向性が決まりました。「興味がある」だけでは解決できないほど、宗教の教義は非常に難解で、理解することに苦労をしました。何とか期限ぎりぎりに完成させて提出したのはよかったのですが、結局考察の及ばなかった疑問を残して卒業したことが、心残りでした。

就職して2年目、仕事にも慣れて生活が落ち着いてきた時、ふと学部生時代に残してきた課題に、今だったら取り組むことができるのではないかと思いました。思い立ったが吉日で、特にポイントも取らず突撃した私を先生は快く迎えてくださり、在学していないにもかかわらず院生のゼミに誘って下さいました。ありがとうございました。

翌年から晴れて大学院に入学し、仕事と学業の両立の難しさをひしひしと感じました。長期履修をしていたにもかかわらずあつという間の4年間で、仕事を言い訳に遅々として研究を進めない私に、先生はペースを合わせて根気よくお付き合い下さいました。また、私の考察結果を否定することなく、その考えを尊重し、関連する文献等を沢山ご教示下さいました。お恥ずかしながら、勉強不足によりあまり自分の論に自信が持ていなかった私にとって、先生が私の考察を否定せず「面白い」と背中を押して下さいましたおかげで、なんとか修士論文も完成させることができました。

また、先生にはいろいろな史料の見方を教えていただきました。その中でも、偽文書の存在のとりえ方は、ゼミに入った前と後では180度変わりました。初めころは、後世に偽作された史料にどのような価値があるのか理解しておらず、そこに真実など何もなく、史料としては使えないのではないかとすら思っていました。しかし、ゼミに入って、偽文書がどのような意図で作成されたのか、どのような勢力が作成したのかを考えることこそが、重要であることを学びました。私は空海の遺告類と卒業論文以来ずっと付き合ってきましたが、空海の遺告類は誰かに偽作されたものばかりで、研究の大変さを実感しました。そのような中でも、先生より学んだ偽文書のとりえ方は、私なりに研究で活かせていると思います。

ゼミ旅行にも何度か参加し、個人では入れないところにも入って見学させていただきました。旅行の先々で、先生が一眼レフで写真を撮られていた姿が印象に残っております。最初のゼミ旅

行先は京都でしたが、先生は2月のとても寒い東寺講堂で1時間ほど熱心に仏像をご覧になっていらっしやいました。見学が終っても宿泊先で夜遅くまでお酒を飲みながら、ゼミ生たちと討論やいろいろなお話をしました。吉田ゼミはお酒に強い先輩方が多く、深夜の飲み会が大いに盛り上がっていましたね。私は内気な人間で、口数も少なく、お酒も弱くあまり飲めませんでした。横でお話をお聞きしているだけでとても楽しかったです。

何かとご迷惑をおかけいたしました。先生のご指導により、何ものにも代えがたい経験を積ませていただきました。ありがとうございます。

先生のことですので、今後も講演やセミナー等を開催されることと思います。このようなご時世ですので、お身体だけはお大事になさってください。先生のさらなるご活躍を心よりお祈りいたします。

とりとめのない思い出話のようになっていました。最後に改めて、ご退職おめでとうございます。

思いがけない贈り物

文教大学文学部 准教授 日沖敦子



机の横に一枚の写真を入れたフォトフレームをずっとかけている。後期課程を修了し、指導教員の服部幸造先生(中世文学)と吉田一彦先生を招いて、ささやかな謝恩会を開いたとき一枚だ。私にとってはお守りのような写真で、大変な時はいつもこの写真に励まされてきた。あの日を思い出し、この写真を見ると何だか頑張ろうと力が湧いてくる。

吉田先生が今年度でご退職される。先生のお祝いの門出であるにもかかわらず、寂しい気持ちになってしまう。大学へ行けば研究室があって、扉を開けば先生がいる。日々見ていなくても、目に浮かぶ日常が続いていると思うから安心できる。でも、それがなくなると、途端に不安になる。こんな気持ちになるのは、私のなかに今も変わらず学生のままの自分がいる証なのだと思う。

私は人間文化研究科が新設されて二年目の学生だった。周りは、後期課程といっても職を持って学んでいる人が殆どで、修士課程で所属していた県立大の雰囲気とは大きく異なっていた。何をどう進めたらいいのかもわからず、とりあえず学会に所属すると、他大学の院生が切磋琢磨しながら発表し、質疑にも的確に回答している姿を見て圧倒された。精一杯頑張ると決めて進学したはずなのに、時間は刻々と過ぎていく。とにかく進めなければと焦る気持ちで押しつぶされそうになっていた。後期課程はそれまでに比べ、何かと苦しいことが多かった。そんな日々のなかでの救いは、吉田先生の研究室だった。

吉田先生の研究室はよくジャズが流れていた。そして研究の話は勿論、音楽の話、学生生活に関わらない話まで、様々な相談を持った学生がよく詰めかけていた。校務に追われ、学生指導に追われ、先生の忙しさは、私には想像できないほどのものだった。しかし、そのような状況にあっ

でも、先生は学生との時間をとても大切にされていたように思う。「俺もう大変なんだよ」と言いながら、どこか楽しそうに話す吉田先生は、ジャズを聴き、メールや電話で校務の対応をしながら、私の研究の相談を聞いていつもの確かな助言を下さった。先生はどんなに忙しくても手を抜かない。それは研究のみならず、学生指導についても言えることだった。吉田先生からは教育者としての姿勢も学んだように思う。

吉田ゼミに混ぜてもらって出かけた奈良国立博物館での「女性と仏教—いのりとほほえみ」(2003年)の展覧会は、その後、自分の研究に大きな影響を与えるものとなった。吉田先生はきっとそのことを察して私に声をかけて下さったのだと思う。脊古真哉先生の車に乗せていただき、吉田先生と脊古先生の楽しいトークを耳にしながらの宗教史懇話会会場までの旅、仙台まであちこち探検しながらの往復は本当に楽しかった。宗教史懇話会では発表の機会をいただいたこともあった。日本史や思想史の研究者らの白熱した議論に圧倒され、深夜(明け方)まで続く懇親会では、年齢や立場を問わず、率直に研究について語り合う研究者らの熱気を今もよく覚えている。宗教史懇話会は、自身が所属している学会では会うことのできない先生や若手研究者と会うことができ、貴重な機会となった。また、同朋大学仏教文化研究所の踏査に連れて行っていただいたことも思い出す。近長谷寺などをバスで巡り、これもまた楽しいひとときだった。

文学研究とは言えない拙文の投稿先を見つけられず困っていた時、『寺院史研究』(寺院史研究会)をご紹介下さったのも吉田先生だった。後期課程二年の頃だったか、投稿する文章がまとまらず、吉田先生がご自身の時間を割いて細かに御指導下さったことは、今も事あるごとに思い出す。

あの頃の私に最も必要だったのは、外の世界を知ることだったと今思う。吉田先生は、幾度と私を外の世界へ導いて下さった。大学から一歩出ると、どんな世界が広がっているのか、先生が私に与えて下さった気づきの場は、楽しいフィールドワークの場もあれば、研究について熱く語る、異分野の研究者の集いの場もあった。私には全てが大きな刺激となった。そして、どれも自分では見つけることができない新鮮な世界だった。

神戸で職を得るまで、名古屋にいる間、事あるごとに吉田先生を訪ねることができたのは幸いだった。先生と私の自宅は方向が同じで、帰りを一緒にさせていただくことがあった。非常勤先での話、研究の話など、短い時間であっても先生に話すとホッとして肩の力を抜くことができた。研究については、考えを整理しきれず混乱していても、吉田先生に話すといつのまにか整理されていった。摩訶不思議な吉田マジックだった。

吉田先生は、私にとって思いがけない贈り物だった。もしあの時、進学していなかったら、吉田先生に会うことは叶わなかった。そして、全く別の人生を歩んでいただろう。後期課程に始まり、険しい坂道続きだったが、何度も転びながらも走ってきてよかった。その折々に、支えてくれた人がいて、何とか乗り切ってくることができた。そのコースのスタート地点から見守り続けて下さっているなかに、吉田先生がいる。

博士論文審査の折、吉田先生は、当麻曼荼羅を研究するならば、アジアへと視野を広げていく必要があるとおっしゃった。私は、当麻曼荼羅が繰り返し制作され、広がっていく過程で、人々がどのように当麻曼荼羅を信仰し、そして曼荼羅とともに中将姫説話をいかに語り継いだのかという点に関心を持っている。ここのところ、奈良の山奥にある尼寺の寺宝整理と史料の解説に追われている。昨年、その調べの一端をまとめ、拙著(『時空を翔ける中将姫』)を刊行した。昨今のコロナ禍で遅々たる歩みだが、人と出会い、そして、住職や関心を持った方々と一緒に気づきや発見を分かち合えるひとときが本当に幸せで、楽しくて仕方がない。そこには、学生の頃と何

も変わらない自分がある。その調査の過程で、江戸時代前期の黄檗僧、獨湛性瑩について調べることになり、最近少しだけアジアへ足を踏み入れている。おそらく審査の折、吉田先生が示唆された当麻曼荼羅の源流を辿るアジアへの視点とは違った視点だと思うが、獨湛について調べていると、そのままになっている先生からの宿題をたびたび思い出す。

後期課程を修了して十五年、本当に早かった。吉田先生に出会えたこと、御指導いただけたことを幸せに思う。そして修了後も、時折気にかけていただき、連絡を下さったこと、温かな優しさとユーモアをもって導いて下さったこと、全てが有り難く、その感謝の気持ちは、どんな言葉をもってしても言い表すことができない。

コロナ禍により、市大へ行って吉田研究室の扉をノックすることが叶わなくなりました。そのことが寂しい。ただ幸い、吉田先生は日本史という領域を超え、説話文学会（2014年「南都・鬼・靈異記」シンポジウム）、仏教文学会（2020年講演「仏書としての『日本靈異記』」）での講演など、文学関係の学会でも活躍されている。今後も、学会などを通して御教示下さることを思うと嬉しく、また有り難く思う。まだまだ研究者としても、教員としても未熟で、走り回る日々だが、あの日よりほんの少しでも成長した自分を見ていただけるように、これからも精進していきたい。

ジャズの流れる研究室

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程単位修得 城 浩介

もうかれこれ二十年前の話だ。私の最初の指導教官であった服部幸造教授の研究室によく吉田教授が訪ねてこられ、そこに私も加わらせてもらったことがあった。研究室には六、七十年代のジャズが流れ、話といっても世間話がほとんどで、くつろいだなかで過ごさせてもらった時間がけっこういいイメージで残っている。

服部教授は幸若舞、説経節など中世の口承文芸を中心に実績（「幸若舞曲研究」三弥井書店など）があり、そこに現代文学の中上健次作品について研究がしたいと、ご指導をお願いした。中上作品には、説経節、神道集などの説話文学に題材をとった小説作品が少なくない。紀州新宮市の「路地」と呼ばれる下町を舞台に、私生児秋幸の葛藤と成長を描いた「枯木灘」等は今でも根強い人気がある。またそこには熊野信仰や修験僧、路地の毛坊主レイジョさん、伴侶のオリユウノオバと、市井の宗教の魅力に満ちていて、吉田教授の専門分野とも重なっている。そこで、服部教授の退官を機に吉田教授にご指導いただくことになったのだ。が、吉田教授の講読会では私が一番の年長、でも若いゼミナリストたちは快く受け入れてくれた。生き活きとした個性たちのなかで、それはじつに楽しかった。

これまでの吉田教授のご指導、市民学びの会へのご協力など感謝する以外にはありません。ただここでは、最近の氏の著書について少し述べさせていただきたい。氏の著書『日本思想史の可能性』（平凡社）に私自身の振り返りの意味を込めて読んでみた。津田左右吉、丸山真男、鈴木大拙、内藤湖南など日本を代表する思想家のそれが、要所をとらえ同時に氏の考えを無理なく加味してうまくまとめられている。（同書「序章」）あらためて、思想論の重要性を感じたものである。そして同じ著書の中で、「（日本の）仏教史は日本史よりも大きい。一国史の枠組みを脱却し

て、アジア史や世界史の観点に立って考究した時、日本の仏教にはどのような傾向があり、また日本の仏教思想にはどのような特色が見出されるのだろうか」と吉田教授は問う。(同書「第3章」)氏は東アジア、とくに中国の影響を受けながらも独自に発展した日本仏教を、世界思想の水準で捉えることを提案されている。ハッとさせられた。その通りだと思う。例えば、空海、最澄、法然、親鸞、道元、日蓮をもち出すまでもなく、「平穩」「平等」「縁」「中道」など、日常に使用する言葉(人間関係)から振舞いまで、仏教思想は日本人の心性と切り離すことはできない。私たちの生活とその思想・理念にまで浸み込んだ日本の仏教を、往来が世界の隅々に及んだ現在、日本史の枠を超えた世界思想として捉えることは当然で、またそれは世界の宗教思想に引けを取らないはずだ。

とにかくずいぶん長い間、ご指導いただきほんとうにありがとうございました。

でも、吉田先生、場外乱舞はこれからですよ。楽しみにしています。

吉田先生からの学恩と私の研究

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士前期課程 修了生 山田康博

私の人生の中で8年にも長くお世話になった先生です。いろいろあり、何を書けばよいか、いろいろ迷いましたが、私の研究と吉田先生から受けた影響をこの場を借りて記します。

2008年の4月に名古屋市立大学大学院人間文化研究科に入学した。きっかけはHPで社会人大学院を検索していた際、見つけたことだった。最初は仕事柄、製造業の総務人事・経理をやっていたため、法学系か、経済学系の大学院か、歴史学の大学院に進学するかに迷った。最後は歴史をもう1回勉強したい!という欲が上回ったため、受験した。最初はいきなり通るとは思わなかったもので、事前に吉田先生へメールで日本書紀のあたりを勉強した旨でお伝えした。試験の際、ドンピシャで日本書紀の問題が出た。時効であるが、多分、先生の配慮によって通していただいた、と理解しております。

入学するまでは、皇學館大學で学んだ歴史観に染まっていた。平成2年に皇學館大学文学部国史学科に入学した。当初は近代史あたり勉強しよう、と思っていた。因みに浅川充弘さんとは村瀬信一先生の研究会でお会いしたのが初めてであった。入学後、田中卓先生から、邪馬台国・稲荷山鉄刀銘、日本国家の成立、神宮史について、渡辺寛先生から日本史学史、古代史全般、類聚三代格、斎王制度、神宮史について、岡田登先生から続日本紀、神宮史の手ほどきを受け、卒業論文は尾張氏について書き、バリバリの坂本・田中史学・大化の改新以前の古代史を学んで卒業した。

その後、家庭を持ち、仕事も安定したことにより、もう1回古代史を勉強したい、と思い、愛知県立大学の聴講生で丸山裕美子先生、近藤毅大先生より古代史を学んだ。その際、「大学院で学んだら、」と県立大学の学生から言われたのも影響があった。

大学院進学後、吉田先生のもとで勉強した。しかし、口に裂けても言えなかったことが、正直、飛んでもないところに来てしまった、というのが実感であった。理由は、これまで学んできたこととは真逆であったことだった。後年、先生にその旨をお話ししたところ、「すまないことしたね」とお言葉を頂戴した。なかでも衝撃的だったのは吉田先生の「多度神宮寺縁起流記資材帳」に関する論文の説明を受けたことだった。物忌が中国の史料に記載されているという指摘(日本は『皇

太神宮儀式帳』に見える。)であった。私には衝撃的で、これにより日本の神祇祭祀は中国からの影響を受けていることを思い知らされた。この説明によって、これまで学んできたことを見直そうと決めたのと、考古学にも関心があったため、祭祀・祭祀考古学について取り組むことを決めた一歩でもあった。

修士論文にて伊勢神宮の創祀について、書きますと宣言した。しかし、締め切り3か月前まで全然まとまらなかった。また、先生にも相談もしなかったため、ご心配の電話を頂戴したりもした。9月のある日、ふと奈良県・南郷遺跡群の木樋の祭祀遺構と神戸市・松野遺跡、出雲大社の建築構造、兵庫県・行者塚古墳の木樋形土製品を何気なく、見ていたらふとひらめき、棟持柱がある側(妻側)、大社造りの構造が古いのではないのか?神明造の構造・配置は新しいのではないのか?と見立て、第1回式年遷宮が行われた持統天皇4(690)年創祀説という、ある面トンデモ説を先生の相談なしに修士論文をまとめて、在学8年目に提出した。自分なりに皇学館で学んだ垂仁天皇25年創祀説に対する疑問からの結論であった。

口頭試問とその後の飲み会の席で吉田先生より 持統天皇4(690)年創祀説をお褒めの言葉を頂戴し、早くまとめるようにと言われました。しかし、未だにまとめきれず、先生の学恩に報いていないのが心残りです。

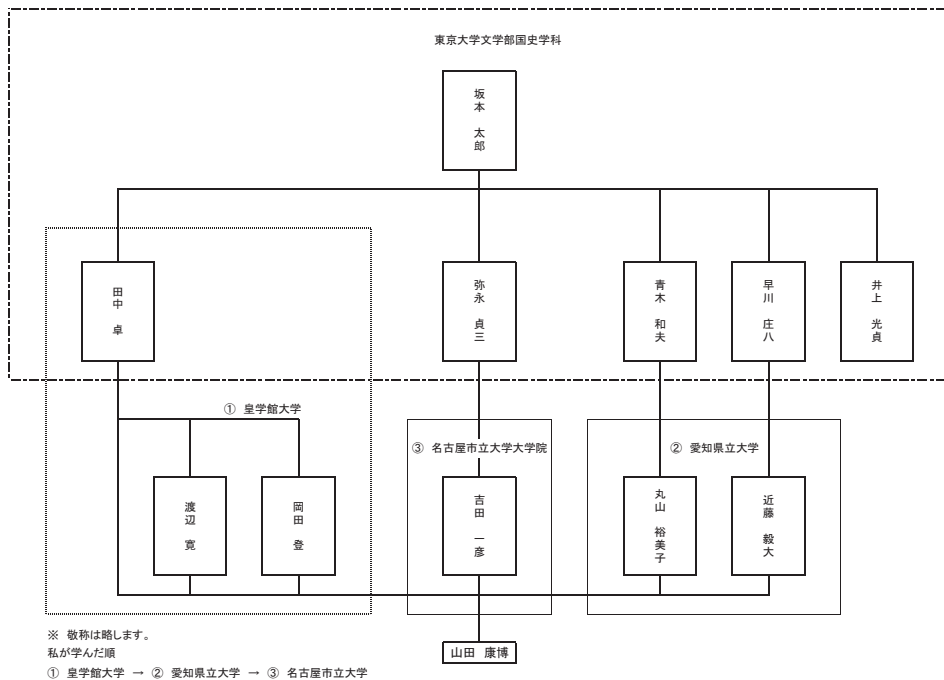


於：名古屋市公会堂

2016年3月25日

名古屋市立大学大学院修了式

私の学統図



吉田先生に学んだ六年間を振り返り

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士前期課程 修了生 大澤尚久

私が名古屋市立大学大学院に入学したきっかけは、日本史の授業で教えていた「国分寺」について何気ない疑問を持ったことからだった。経済学専攻だった私にとって、より深い内容の歴史やその他新しい分野を学べる大学院の講義はどれも新鮮で興味深かった。しかし、大学時の論文執筆経験が乏しく、修士論文の執筆は私にとってかなりの難敵であった。特に研究分野の異なりから、歴史分野の論文はおろか、論文の執筆の仕方をよく理解できていないことに、力不足を痛切に感じないではいられなかった。そのため、私の書く論文はとても珍妙で不恰好であり、さらには国語力のなさから文章の体を成してないことも多かった。しかし、吉田先生は私の執筆途中の論文を添削する都度、読みにくい私の文章と格闘し、問題点を数多く指摘してくださった。指導の際の先生は、普段の温厚な先生からは考えられないほど厳しい研究者の目線となり、私にとってはとても怖い存在だった。もともとは自分の実力不足が根底の問題としてあるのだが、先生からの質問に答えられず硬直したり、先生が論文を読んでくださっているときのなにげない「うーん」という唸りにすら心底怯えたものである。仕事の忙しさを理由に論文執筆から目を背けようとした時期もあったが、ゼミ後の帰宅時に先生と論旨の検証や方向性の確認、史料に対する意見交換などを行う中で、発見・研究することの楽しさを改めて知る機会も多かった。その結果、二年長くかかったものの、先生の厳しさにあるやさしさと、時折見せてくださる愛嬌のある応援に助けられ、無事に修士論文の執筆を終えることができた。これは、本当に先生の私の論文に対する忍耐力あるご指導のおかげである。

研究者としてとても厳しい吉田先生だが、ゼミ旅行などに行くと、その厳しさとはかけ離れた好奇心旺盛な姿を見せてくださるのが印象的でもあった。旅行先で寺社や遺構を見つけると我先にと突撃し、また、子供のようにカメラを片手に走っていく様は、研究室で見せる顔や私の論文と格闘している際の顔とは全く異なり無邪気そのもの。一年時に初めてゼミ旅行に行ったときには面食らったものであった。

特に印象に残っているのは、2020年の3月に行った大分へのゼミ旅行での出来事である。ゼミ旅行全行程終了後、さらに多くの摩崖仏などを見学・調査するために、有志が現地に残ることになった。大分市内の森岡小学校前から林の中の狭い道を70メートルほど下った石窟の中に鎮座している曲石仏に行ったときのことだった。現地に着いたときにはすでに夕方。あたりが薄暗く、私たちが林の様子に戸惑うなか、ただ一人先生は勇敢にカメラを片手につき進んでいく。そして、徹底的に写真やメモを取り終えた後、先生は初めて辺りの暗さに驚き、多少困惑した表情を見せたのである。

このように好奇心の赴くまま対象にまっすぐと直進する姿は、研究室で見せる思慮深さとは違うものだ。しかし、ときに子どものような純粹さで調査を楽しむその行動力も、研究者としての本質だと思う。私たちもその姿に強く惹かれると同時に多くのことを学ばせてもらっている。

だが、私が一番好きなのは、奥様に怒られると眩しながらも、何かと理由をつけ酒宴を楽しまれる先生のお茶目な姿だったりするのである。

吉田先生との6年間で学んだことと感謝

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士前期課程 修了生 笠原麻由佳

初めて吉田先生の授業を受けたのはまだ私が国際文化学科1年だった頃だ。歴史を学ぶのが苦手だったにもかかわらずその講義に魅了され、気づけば教室の最前列で聴くようになっていたがそこから早いものでもう7年が経とうとしている。吉田先生への感謝と思い出は書き出せばきりがないが、ここにその一片を綴りたいと思う。

ゼミでの思い出といえば、研修旅行がそれを大きく占めるひとつである。桜の散りきった吉野では山岳信仰をなぞって山を歩き、三河では四方へ車を走らせ荘園の足跡を追った。いま私は京都市内烏丸通に面したホテルの一階にあるカフェでキーボードをたたいているが、ここもゼミで研修旅行に京都を訪れた際に宿泊した思い出のある場所だ。その他大阪など関西方面が多かったが、直近では飛行機で大分県へ飛び、たくさんの磨崖仏をまわった。先生や先輩方の談議を聞きながらの旅は贅沢そのものだったが、研修旅行では何より先生のさらさらした目と楽しそうな姿を見ていることが私にとって一番楽しく幸せだった。興味があるものが目の前に現れると周りが見えなくなり、どんな道でも先頭に立って分け入って行き一心不乱にシャッターを切る。吉田先生はその背中が今も目に焼き付いているほど好きだったが、それは私だけではないはずだ。こんなにゼミ生から愛されている先生を私は吉田先生以外に知らない。吉田ゼミというコミュニティに私をいれてくださった先生には感謝の言葉をいくつ重ねても足りない。

思えば私は学部生時代から出来の悪いゼミ生だった。『日本三代実録』を読んでいたゼミで自身の担当のときに作ったレジュメはきまって中身も紙の枚数も薄っぺらかったし、卒業論文ではテーマ決定のためにいくつか文献を示していただいたのにそのすべてを読むことすらできなかった。ただただ吉田先生の講義やゼミで過ごす時間が好きだった。まだこの環境で勉強がしたいという思いだけで大学院進学を希望した私を、吉田先生は両手を広げて受け入れてくださった。その頃は研究したいことも決まっておらずただ吉田ゼミに居続けたかった一心だった私だが、無事修了できたのは先生のおかげ以外の何ものでもない。修士論文執筆の際、なかなかタイムライン通りに書き進められない私に、先生がネガティブなおっしゃることは一度もなかった。ご多忙のなか私の拙い文章を何度も読んで直し、多大な時間を割きご指導いただいた。おかげで今の私がある。吉田先生にご指導いただいた時間は、確実に今の私にとって生きていく上での糧となっている。

今年は新型コロナウイルスが猛威を振るい、苦しい一年となった。疫病が流行った頃の古代日本はどんなだっただろう。そんなことを思いながら、あの頃皆で読んでいた『日本三代実録』を思い出す今日この頃である。あの年は大変だったね、と笑いながら先生や先輩方とアクリル板の隔てなく話せるときが来るのが待ち遠しい。

最後に、吉田先生お疲れ様でした。先生の長き教壇生活の片隅に私が残っていれば幸せです。これからも数多きファンのひとりとして、吉田先生の研究を楽しみに追いかけていきます。

吉田一彦先生のご退職に寄せて

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士前期課程 伊藤信吉

日本思想史・宗教史・古代史をご専門とする吉田先生には、日本中世史を専門とする私をゼミに受け入れて頂き、感謝しております。吉田先生は、博学にして飾り気無く、院生に対しても対等な立場で議論をされました。ゼミの雰囲気も自由なもので、大学院生ながら社会人という状況、そして拙いながらも論文執筆を続けてきた私にとっては、学びを継続しやすい研究室でした。本稿を書きながら思い出す、コロナ禍以前のそう遠くない過去の記憶が、今は懐しくまた夢のようにすら思えます。

令和元年の春・夏、吉田先生の史料講読を受講しました（教材は慶滋保胤『日本往生極楽記』）。先生は、発表者の発表を遮ることなく最後まで聞き手に徹し、その後に解説、そして漢文の音読をされました。その音読は、勢いよく名調子といったもので、大学時代の中世史の先生の漢文の音読とは違った趣で、両方とも耳に残っています。対面しての受講には、文字について学んでいながら、文字以外の部分での人と人との交流に醍醐味があるのかも知れません。

また夜間に行われる先生とゼミの先輩方との研究会も楽しいものでした。研究会では『神道集』を題材にし、私は中世熱田社における神仏習合について発表を行いました。拙い内容ながら、吉田先生にはご納得頂けたような印象を受けました。何となく肩の荷が下りたのか、帰路に見上げた秋月は殊に清明に見えました。二月の冬休みには、先生とゼミ仲間であらゆる状況で九州へ研修旅行に出かけましたが、こうした交流は他に代え難いものです。

やがて新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を奮い、人々の暮らしに多大な影響を与えるに至りました。私は令和二年度の通学を極力控え、論文執筆に注力しました。修士論文案や学内誌に寄稿する為の小論ついて、メール等で吉田先生からご意見・添削を頂戴しました。十数年来、我流に陥っていた私には有難いもので、自身の蒙を啓かれた思いです。

本稿を書いている令和三年一月中旬、感染症拡大により愛知県は政府発出の「緊急事態宣言」対象地域となりました。一日も早い感染症の収束（終息）、そしてコロナ禍によるあらゆる状況の困難者が、一人でも多く救われることを願っています。

ここ一年、ワクチン・治療薬・治療方法の開発・研究といった医学・薬学の発展に希望を見出す一方で、世の有り様を見て、今更ながら人文知の重要性に気づかされた思いがします。文学や芸術もまた、人々の精神に宿り、日常に平安をもたらし、時に世の中を動かしていく力の源になるものだと思います。

吉田先生の歴史学には、興味のある疑問を解き明かそうとする純粋な探求心と、古書を紐解き、現代の問題を解決し、未来を見出しそうとする為の強い使命感が、共に内在しているように思えます。そのように思える学問に触れることが出来たことは幸いです。限られた一生の中で何の研究に注力すべきか、自分自身の主張とは何なのか、ということ自ずと深く考えさせられます。

短い間ながら、また文字通り末席を汚した者ではありますが、深甚の謝意を表しつつ、吉田先生の今後のご多幸とご健筆を祈念致します。

光栄です。最後の教え子となりました。

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士前期課程 鈴木英年

吉田先生、御退官おめでとうございます。そしてお疲れさまでした。この紙面をお借りしまして、私の勝手な先生との思い出を記します。

私が仏教に興味を持ち始めた頃、手に取ったのが出版間もない佛教史学会編『仏教史研究ハンドブック』（法藏館 2017）でした。その執筆者の一人として先生が、「国分寺・国分尼寺の建立と大仏造立」について解説されていましたが、当時は先生を存じ上げず、その項目もスルーするような失礼な勉強を行っていました。そして先生のご尊顔を拝したのが、一方的ではありますが2018・5・30、中高年の男性に人気のあった井上あさひ NHK アナウンサーが案内役を務める「歴史秘話ヒストリア 神と仏のゴチャマゼ千年 謎解き！ ニッポンの信仰心」です。冒頭まもなく古代仏教の解説者として登場されたのが先生でした。その印象は少し気難しい方かな（これはあくまでもテレビ画面から受けた印象であって、実際とは全然ちがっていました。とても気さくな方です。）と受け取りました。その時のコメントは、「仏教は新しい文明であった。豪族はどうしても手に入れたいものであった。そして文明開化のように、新しい文明に飛びついていった。」と短いものでしたが、明治維新期の神仏分離を学びたいと的を絞っていた私にとり、どこか印象に残るものでした。この番組は今も録画して残しております。ただこの翌年に先生にお世話になるとは思いもよりませんでした。

そして名市大に入学し、「研究計画書」の作成で何から手を付けてよいのか悩んでいた時、「明治維新期に新たに独立した神社を取り上げてみては」というアドバイスを受けました。それから三社の神社を調査するために、毎月のように長野、吉野、浜松と現地を訪れ地元の図書館などから資料を探しました。しかしここでも私の怠け癖が出て、妻をコピー係として同伴させ、扎扎实り旅行気分も味わいさせてもらいました。先生のアドバイスによって家族孝行ができ、感謝しております。

最後の年度は、大変な一年となりました。新型コロナウイルスにより、思うように学校に行けず、先生との対面も少なくなり、私自身に集中力が続かず不勉強となりました。しかしながら「日本霊異記」の講義は、先生ご自身が若い時から研究しておられたこともあり、幅広い知識をご教授して頂き大変興味を持つことができました。先生はどの講義においても、発表者の問題意識に興味深く耳を傾けられており、研究意欲を掻き立てる方向へと導いてくださいました。

先生のエネルギーなご活躍が、引き続き幅広い年代に影響を与えることに間違いありません。どうかご自愛され、ご家族との時間を深められることもお願い申し上げます。先生とのご縁を感謝し、今後も大切にしていきたいと思っております。ありがとうございました。

恩師 吉田先生との思い出

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士前期課程 西山亮介

吉田ゼミに初めて足を踏み入れたのは、平成 26 年、私が大学二年生で、後期からのゼミを選

択する時でした。私は高校時代に日本史では無く世界史を履修していて、これは英語と並んで最も得意とする教科でした。深い考え無しに、「国際」の名の付く故に本学の国際文化学科に入学した私は、世界史や英語に関係するゼミを選択するつもりでした。幾つかのゼミを巡っていて、偶然誘われて吉田ゼミに赴いたのです。衝撃でした。なんと朗々と漢文を読み上げているのです。吉田ゼミ伝統の『日本三代実録』講読会でした。日本の歴史書が漢文体とは、当時の私には思いも寄らせませんでした。世界史に自信があっても、日本についてはよく知らない。そこで、日本史を学ぼうと思い立ちました。同時に、漢文を流暢に読み下すという能力に、何故か惹かれたこともあり、その場で吉田ゼミに決めました。これが吉田先生との出会いでした。

以来、吉田先生は私を研究の世界に導いて下さいました。吉田先生門下の先輩、同輩、後輩たちは、優秀で個性的で、何より温かい方々です。皆さまには研究面を始め、社会一般のことや、酒のご指導を受けたりして、大変お世話になっています。また、名古屋古代史研究会にご紹介いただいたり、蓬左文庫典籍研究会にお手伝いとして参加させていただいたりもしました。こうした、研究の世界との出会いは、偏に吉田先生のお陰です。

コロナ禍以前は、よく飲みやゼミ旅行にご一緒させていただきました。先生はお酒に強く、またお酒を愛しておられると思います。ゼミ室(1-705)に先生や門下生らで集まり、どんちゃん騒ぎをしたのは、良い思い出です。他にも、花見と称して一号館の裏手で酒宴をすとか、何か事あるごとに皆で飲んでいました。また、度々ゼミ旅行にも参加しました。各地の寺社仏閣、博物館、遺跡等を巡り、夜は必ず宴会でした。先生の、いかなる険路もものともせず、全く年齢を感じさせない足取りや、些細なものも決して見落とすまいとする強固な心意気には、いつも驚嘆していました。

学部三年生の折の奈良県吉野へのゼミ旅行は、私には最も意義深いものでした。漠然と仏教に興味を抱いていた当時の私は、修験道の影響を今なお色濃く保つ吉野の寺院に魅了されたのです。これを契機に修験道に関心を持ち、更に先生の「浄蔵をやってみたら？」という一言で私の卒業論文の方向性は定まりました。僧浄蔵は、修験道との関連が窺われる人物です。後に修士論文でも浄蔵をテーマとしました。あのゼミ旅行は私の研究の原点となっています。

卒業論文をご覧いただき、先生から「悪くないよ」というお言葉を頂戴しました。私はお褒めの言葉と勝手に解釈し、狂喜して卒業後も研究を継続しようと決めました。結局、学部卒業後に就職しましたが、やはり学問への思いが収まりません。そこで先生に、社会人しながら大学院へ進学したい旨を相談したところ、先生は、「業が深いね」と仰って快く歓迎して下さいました。以来、修士課程の二年間、再びお世話になっています。

先生の徹底した論理的思考や批判的思考、それらの源泉となる膨大且つ精確な知識量に憧れていました。到底私には及ぶべくもありませんが、先生と出会えて僥倖でした。また、学問に限らず、先生の何気ない一言は、往々にして意味深長に感じられました。学部生の時分から、そういった言葉は多く私の記憶に焼き付いています。

追い詰められないと取り組まず、勝手気ままで未熟極まりない不肖の私に、先生は辛抱強くご指導して下さいました。今日まで私が拙いながらも研究を続けているのは、先生のご指導の賜物です。本当にありがとうございます。